



1



2



3

1=選手は、スタート前日から、3日間テント生活。雨が多いので、テント内でレースの準備がしやすいように、大きめのテントを準備することをお勧めする。フライトも忘れずに。2=コースからの景色。緑がどこまでも続く。海のイメージが強いニューカレドニアのもうひとつの面を見ることができ、味わえる。3=夕食の準備中。ガスを使わず、まさか火をおこし、料理をする。地元料理は、おいしい。4=地元の子どもたち。島の人たちはフレンドリーで、誰もがあいさつしてくれる



4

Competition World OVERSEAS 07

Transcalédo niennne



“チーム制レース”
[トランスカレドニエンヌ]
<http://transcal.ile.nc/>

天国にいちばん近い島——ニューカレドニア。
エメラルドグリーンがまぶしい海のイメージが強いこの島だが、
じつは山とジャングルといった奥深い自然も広がる。
今回、小誌ではトップアスリート3人にチームを結成してもらい、
この島での名物レースに参戦してもらった。

文☆山本健一 Text by Kenichi Yamamoto 写真☆藤巻 翔 Photo by Sho Fujimaki

Spec

開催エリア_ニューカレドニア 開催時期_6月30日~7月1日
総距離_63km(初日36km、第2日27km) 制限時間_30時間
累積標高差_5,500m 関門数_
定員_名 参加費_\$
参加資格_大会指定レース(HP参照) 完走による規定ポイントの取得
申し込み方法_大会HPよりエントリー



ディナーは豪華。さばいたばかりの鳥の串焼きは、噛めば噛むほど口の中に味がしみわたる。絶品。なんとナオは、肉がまったく食べられない。山チューは、食べると止まらない



急速結成!

チーム「Trail Running magazine Japan」

本大会出場のために結成した即席チーム。メンバーは、横山峰弘(ヨコヤマ)、山室忠(ヤマムロ)、藤巻奈緒美(ナオ)と監督藤巻翔(詳しいメンバー紹介はP.70)。合言葉は「Pacific Heart」。さて、どんなレースを展開するのか!

「7月にニューカレドニアで、トレイルランニングのレースがあるんですけど、出ませんか!」

監督兼カメラマンの藤巻翔くんからの突然の電話だった。

ニューカレドニアと聞いて、頭の中でイメージが膨らむ。南国、天国にいちばん近い島、どこまでも続く青い空と青い海、そして白いビーチ。

山、トレイル、ジャングルといったキーワードは、まったく浮かんでこなかった。

「どんなレース?」

「3人でチームを組み、男女ミックス、レースは2日間でテント泊。アドベンチャーレースのようなトレランレースです」

内容をすぐに受け入れることができ、即OKした。

私以外のメンバーは、山室忠(山チュー)、国体XCスキー4連覇。藤巻奈緒美(ナオ)、言わずと知れたトライアスリート。バリバリのアスリートチームだ。

これなら間違いなくレースを楽しめる。ナオのことは知っていたが、山チューとは、まともに会話をすることがない、山チューを知

機内からの風景。吸い込まれそうなほど青い海がどこまでも続く。言葉を失う。天国にいちばん近い島—どうしてこんなに青いのだろう。きれいですぎる! 感動! 泳ぎたい!



1

2

3



4

5

6

る人たちにどんな人柄か尋ねると、口々に「いいやつだけ〜」。次に「いじられキャラだよ〜」。もう大丈夫だ。楽しくやっつけていける。

*

成田空港でチーム「Trail Running Magazine Japan」初対面。いざ出発!

成田から直行便で約8時間30分。南国の楽園ニューカレドニアに到着した。さわ

やかな気候。首都ヌメアのあるグランドテール島の大きさは、四国ほどの大きさがあり、南太平洋では、3番目に大きい。中央部には、標高1,000mもの山脈がある。海だけではなく、山でも遊べる南国の島だ。

トレイルランニングレースは、毎年開催されており、今回で21回目となる。チームはミックス(男女)、男性チーム、女性チームの3クラスあり、2日間の合計タイ

ムで争われる。3名1チームのチーム戦で、3名と一緒にスタートし、助け合いながら、ゴールする。2日目には、ジュニア部門、地元住民の方々、ハンディキャッパー(障害者)クラスのレースも開催。

さらに本大会の特徴は、島の南部地域、北部地域を1年ごと交互にレース会場が変更されるという点。毎年異なるコースでレースが行なわれるので、毎年違ったレース

を味わえるのだ。

2012年度は、島の西北部で開催され、1日目36km、2日目27kmの63kmのコースが用意された。ジャングルや川を渡るなど、自然要素たっぷりのネイチャートレイルコースだ。

ヌメアから車で4時間ほど移動して、スタート地点の村に到着。レースに参加しないとこんな奥地まで行けないだろう。

1=早朝、レーススタート。ランナーが一斉に飛び出す。スタートしてすぐにダブルトラックからシングルトラックへ入るため、渋滞にはまってしまふ。もっと飛ばせばよかった。2=トレイルが葉で目に見えなくて当たり前。かき分けながら、滑らないように進んでいく。日本のレースではまずお目にかかれない貴重な体験でもある。3=ジャングルとにかく暑い。汗が止まらない。でもなぜか楽しくて、みんな笑顔。4=ほかのチームは、牽引ロープを準備。我々のチームも1日目終了後に、すぐに準備した。5=山チュウ山道選手の手はデカイ! いい押しをする。さすが! 6=泥だらけで1日目ゴール。男女ミックス部門8位

広大なジャングルの中をひたすら進んでいく。これまで持っていたニューカレドニアのイメージが吹っ飛んだ。でもこのジャングルのフィールドも魅力的だ



左=ゴール会場には、地元の料理、お土産の店が多数。地元の方々は、とてもフレンドリー、いつでも向こうからあいさつをしてくれる。右=走り終え、シャワーを浴び、ホッとひと息。みんなアスリート、足のケアに余念がない

仲間とともに助け合い、
自分の限界、チームの限界に挑む。



地元住民の方々の儀式。山に入らせていただき、彼らにとっては生活道のトレイルを使わせていただく。また選手の安全を祈願。村の人々に感謝。最後に選手たちも踊りに参加すると受け入れられた気分になる



山チューの絶妙な距離感。レース中、常に心配し声をかける。前のナオにプレッシャーにならないよう気を使う

ジャングル、日本にはない感覚。
童心に戻ってしまう。



左=1日目、ゴール前で大きくコースミスをして、写真正面からゴールに向かって走ってくるはずが、写真手前、反対側から通り抜けてゴールとなった。なんとも恥ずかしかった。右=エイドステーションでは、毎回山盛りのフルーツ。ランナーにとっては、とてもうれしいものだ



橋がかかっていないので、水の中を進むしかない。いい大人たちが、無心になって、泥だらけになり、びしょびしょに濡れ、膝、肘を擦りむいて楽しんでいる

明るいうちに、村の広場にテントを張る。夕方、村の長老からのあいさつ、儀式がとり行なわれた。山に入らせていただく、トレイル使わせていただく、安全を祈願していただく、感謝の気持ちを忘れずに。改めて教えられた。
フランス領ではあるが、元々生活しているメラネシア人の各部族の長に許可をもらってレースが成り立っている。日本のトレ

イルランニングレース同様、地元の方々の理解、協力なくしてはレースができない。夕食には、しめたばかりの鳥の串焼き、タロイモ、サラダ、白米など、豪華な地元料理がたくさん用意された。どれもおいしい！白米があるので、日本人にはありがたい。
夕食後は早朝のスタートに備え、早めの就寝。山チューとふたりでテントに入る。

山チューも体が大きいので、テント内が狭く感じる。もっと大きいテントを用意しておけばよかった！
ここは雨が降る確立が高いし、レースの準備、ストレッチもできる大きめのテントを持ってきたほうが良いと学んだ。もちろんフライシートも忘れずに。
朝食は、フランスパン、ヨーグルト、フルーツ、ジュースなど、しっかりと食べた。

会場はというと、レース直前なのに、のんびりムードだ。スタート直前に集まる選手も同様だ。南国らしい！
とはいえ、そろそろレースモードに入ろう。私たちが参加した男女ミックスクラスは、61チーム、選手183名がエントリーしていた。薄暗い中、レースがスタートする。意外とペースが速い。
スタート直後、ダブルトラックからすぐ

にシングルトラックへと入る。やってしまった！渋滞にはまる。抜こうにも抜けないし、足元が滑る。あわてても仕方がないので、バラけるまで辛抱することにした。
トレイルランニングレースでは、今まで体験したことがないほど、地面がぬかるんでいる。急な登りでは、草や木をつかまないと滑り落ちてしまうし、下りは、足の裏で滑りながら進む。急な下りは、きれいに

1=2日目、朝霧の中スタート。日の出と共に徐々に明るくなり、空も青くなっていく。またもや気づいたのが遅かった。この先すぐにトレイルが狭くなった。2=チームメイトがどんどん前に進むので、遅れないように。1人でレースをするより頑張れる。3=Team「Trail Running Magazine Japan」。川を渡る時も笑顔。山チューは、レース2日間を通じて1回しか転んでいない。バランス感覚抜群。4=カメラマンにポーズをする余裕のあるチームも。5=蒸し暑いジャングルの中を走る。日本のレースでは味わうことはできない。6=ゴールをする時は、どのチームもメンバー同士、腕を組んだり、手をつないだり。最後まで一緒に走ってきた喜びの証





1=ゴール後、どのチームも笑顔。達成感に満ちあふれている。2=特別賞「日本チーム1位」をいただいた。どんな表彰であれ、うれしい。トロフィーは、大きい。総合では6位だった。3=参加者のなかには、子どもも！ コースが短いとはいえ、ぬかるみのタフなコースを完走。Good job!

チームメンバーと感動を共有できる。 この一体感が素晴らしい。

滑り台になっている。止まらないので、グローブが必要だ。

また、途中、川を渡るところが何か所も出現する。深いところは、膝上まで。こんな泥だらけのつらい状況にも関わらず、ナオは笑っているし、よくしゃべる、よく食べる。なんでこんなに元気なの！ いったいどこからこのエネルギーが出てくるか。一方の山チューは、黙々と時に滑り落ちそうなナオをでかい手で支える。素晴らしい気遣い。

このチームワークのおかげで、中盤からどんどん順位を上げていく。初めて組んだとは思えないほど。初日は、8位。

2日目は、初日の反省を踏まえ、牽引ロープを準備した。前半からいい順位につけ



る。だが、ペースが上がったため、マーケティングを見落としてしまい、コースミスを2度してしまう。

じつは、初日にもゴール手前で大きなミスをした。ミスをリカバーするスピードがあり、先行されたチームを抜き返した。最終的には、2日間でミックス部門総合6

位となった。

何回も川を渡り、泥だらけになりながら走り、滑り落ち、エイドステーションでは、たくさんのフルーツを食べ、レースをおもいっきり楽しんだ。

今回の目標は、「チームでおもいっきり楽しむ！」。達成できた。ゴールでは、3人ともいい笑顔。拍手で迎えられる。私自身あまり笑顔がないので、珍しい。

自然が大好きなトレイルランナーには、このレースはお勧め。ニューカレドニアのもうひとつの自然、山をおもいっきり楽しめる。

ヌメアに戻り、ビールで乾杯。またこのチームで参加しよう！ 海で泳ぐぞ〜。



青い空、透き通るような青い海、白い砂浜。自然が作り出す色は、鮮やか。美しすぎる



1・4=民芸品の数々。細部までいねいにしっかりと造られた、まさに芸術品。家の中に飾っておきたい。2=フランスパンは、歯ごたえがあっておいしい。貝がたくさん挟んであるので、1本でおなかがいっぱい。3=海を見ながらのんびり食べたい。サンドウィッチを買ったお店の近くで、5=海辺を散歩。歩いているだけで気持ちがいい。6=ヌメアから30分ほどボートに乗ると、すてきな島に到着。スタンドアップパドル、シーカヤックをレンタルできる。現地日本人が常駐している島もあるので、安心。説明ももちろん日本語。沖に出すぎると潮流や風の影響で戻れないなど、危険なこともあるので、注意事項は必ず確認してから遊ぼう

Sightseeing

仲間と楽しみ尽くせ！ ニューカレドニアを遊ぶ・食べる・泊まる

ニューカレドニアへは、成田からエアカランの直行便で約8時間30分。オーストラリアの東部、南太平洋に位置する。青い空、青い海、そして世界自然遺産である広大なラグーン。この南国の島には、毎年多くの観光客が訪れる。ヌメアの街には、カフェ、レストラン、お土産店など数多くの店が立ち並び、ポートモデル湾の前での朝市は有名。大型スポーツショップもありトレイルランニングやキャン

プの装備も充実。スーパーマーケットもあり何でもそろ。食事は、サンドウィッチ以外にもハンバーガーショップ、シーフードレストランもあるので困らない。今回は、私たちが、プリプリのエビをいただいた。トレイルランナーにとってシーフードは、ヘルシーで最高！ レース後に余裕を持って滞在し、海で遊ぼう！ 泳ぐだけでも気持ちがいい。ニューカレドニアを存分に楽しみたい、もったいない。

問い合わせ ニューカレドニア観光局
(TEL03-3583-3280
www.newcaledonia.jp/)、
北部州観光局 (www.newcaledonia.jp/area/grandterre_n.html)、
エアカラン (www.aircalin.jp/)

Column

チーム「Trail Running magazine Japan」 メンバー紹介&参戦コメント

藤巻監督(兼カメラマン)のひと声で、急遽集まったアスリートチーム。今回の目標は、「ニューカレドニアをおもいっきり楽しむ！」。メンバーは、最年長の私、横山峰弘(ヨコヤン)、山室忠(山

チュー)、藤巻奈緒美(ナオ)。3人とも、トレイルランニングのレース経験は、充分。結果、男女ミックス部門、61チーム中6位。「おもいっきり楽しむ！」目標達成。



キャプテン
Kenichi Yamamoto

長年アドベンチャーレースを経験してきた日本のトップランナー。2006年以降のチーム競技に出場。「ここ数年、トレーニング、レースともにひとりでやってきたので、新鮮。ニューカレドニアという南国の雰囲気も手伝って、リラックスでき、とても楽しめた。次回も同じメンバーで出場したい！」



メンバー
Tadamshi Yamamoto

チームモントレイル/マウンテンハードウェア所属。「とにかく楽しかった！ 想像以上のジャングルトレイルに冒険心をくすぐられました。チームで力を合わせてゴールする達成感は最高。地元の人たちとの交流も印象的。現地スタッフのジョージもナイスガイ(笑)。また挑戦したいですね！」



メンバー
Nomi Fujimaki

高校テニスで全国制覇、その後トライアスロンに転向。2008年までアイアンマン日本人女子のトップとして活躍。「久しぶりのレース、チームでレースすることの楽しさを初めて知りました。こんなに楽しいと思ったレースも初めて。仲間の励みや、ニューカレドニアの最高の景色のおかげです！」



カメラマン兼監督
Sho Fujimaki

トレイルランを主にさまざまなアウトドアシーンを撮影するフォトグラファー。監督兼任。「山中は道があまりなく車の先回り困難、大会のヘリを駆使し撮影を行いました。通過する選手みんな傷だらけだけど、表情は笑顔に満ちていた。海、ジャングル、原住民と興味深い被写体だらけだった！」

